



次郎長生家：表通り（1）



次郎長生家：裏通り（2）

昨年末から年始にかけて、SHECの活動（H25 国交省事業：SHECを核とした歴史まちづくりネットワークの実践）に参加し、静岡市清水区にある「次郎長生家」の耐震診断業務を担当させて頂きました。そこで今回は、その経験談を中心に伝統的な軸組構法や調査方法について考えてみたいと思います。

■歴史的な木造建築物≠理想的な伝統構法

戦前に建築された歴史的な木造建築物のほとんどが、木材（正確には木材の接合部、仕口）のめり込み特性に依存する伝統的な軸組構法であるという先入観をもっている方も多いかもかもしれません。しかし、現実には理想的な伝統構法や現代構法ではなく、どちらともいえない中間的な性格をもっているものが多いという指摘があります。（参考「大阪府木造住宅の限界耐力による耐震診断・耐震改修に関する簡易計算マニュアル」）

私もこの指摘に賛成です。私自身、数多くの古い木造建築物を耐震診断しましたが、理想的な伝統構法に出会ったのは数件でした。歴史的に価値がある木造建築物や古い木造建築物であっても理想的な伝統構法であるかどうかは現地調査によって、冷静に判断しなければなりません。そして、そのためには伝統構法における構造知識が必要となります。

■次郎長生家は伝統構法なのか

次郎長生家は、表通りに面する平屋建ての建築物（1）と裏通りに面する2階建ての建築物（2）が別棟として存在しています。多くの観光客の目に触れるのは（1）です。表通りに面する建築物（1）は、かつて店舗として使用していたこともあり、使用されている柱や梁材は立派なものが多く、理想的な伝統構法と判断しています。対して、建築物（2）は住居として使用し、何度も改修した経緯があり、伝統構法とも現代構法ともいえない中間的な性格をもっていると判断しています。調査すればするほど、二つの建築物は別物であると私には思えました。改修計画も方針を分けて検討する必要があります。

■今回は理想的な体制で調査

歴史的建造物の耐震診断については、構造に詳しい建築士、意匠に詳しい専門家、施工に詳しい大工職人等によるスリーマンセル（三人一組）体制が理想と考えています。ただし、今回の調査のように耐震診断だけでなく、歴史的価値という点についても調査する場合は、歴史に関心と知識が高い会員の参加が必要になると思います。

今回の次郎長生家の調査に参加した建築士会会員は、それぞれに得意分野があり、理想的な体制で取り組むことができたと思います。

■まちづくりに活かそうという動き

現在、次郎長生家は、「次郎長生家を活かすまちづくりの会」という組織が中心となって、修繕や改修を目的とした募金活動やまちづくりに活かす方法を検討しています。今回のSHEC活動（調査）によって、歴史的価値だけでなく、伝統構法という構造としても価値がある存在という点を所有者や活かす会に対して伝えることができたという点だけでも意義があったと思います。改修計画によっては、次郎長生家が、歴史的価値だけでなく、伝統的な軸組構法としても観光客に注目して頂ける可能性もあります。

■培ってきた知識を活かすことができた喜び

今回の次郎長生家の耐震診断は、限界耐力計算という伝統的な軸組構法に広く使用されている計算法を採用し、第三者（JSCA関西）によるチェックも実施しています。この計算法を習得し、歴史的建造物に対して実践することはかねてから目標としていたことです。

建築士会会員としてSHECに参加し、私は限界耐力計算を使う機会だけでなく、調査を通じて先輩会員との交流や意見交換といった機会も得ることもできました。この経験は、私にとって大きな財産になったと思います。

（静岡県建築士会志太地区 伊藤 貴広）